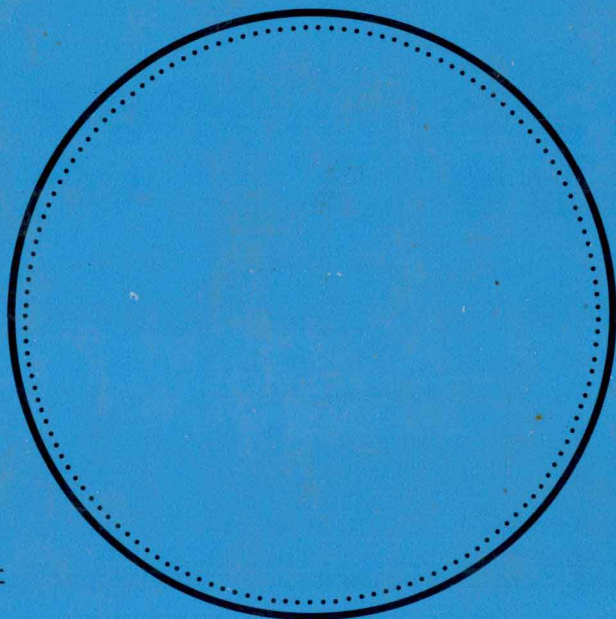


貨幣

歴史・理論・政策

R・F・ハロッド 著／塩野谷九十九 訳

Money R F Harrod



東洋経済新報社

貨 幣

—歴史・理論・政策—

R・F・ハロッド 著

塩野谷 九十九 訳

東洋経済新報社

訳者紹介

昭和5年東京商科大学本科卒業。現在名古屋大学
名誉教授、南山大学教授、経済学博士。

〈著訳書〉 ケインズ『雇傭・利子および貨幣の一般理論』（翻訳、昭和16年）、『乗数の理論』（昭和23年）、『ケインズ経済学の展開』（昭和25年）、『経済発展と資本蓄積』（昭和26年）、ハリス『ケインズ入門』（翻訳、昭和32年）、『原典解説ケインズ「一般理論」』（昭和36年）、『近代経済学』（昭和37年）、『金融政策と物価水準』（昭和42年）、リーキャッシュマン『ケインズ時代』（翻訳、昭和43年）、など。

〈現住所〉 名古屋市瑞穂区弥富町桜ヶ岡 44-2。

貨幣——歴史・理論・政策——

昭和49年2月20日 第1刷発行

昭和54年8月20日 第5刷発行

訳者 しおのやつくも 塩野谷九十九

発行者 中井義行

発行所 東京都中央区日本橋本石町1の4 東洋経済新報社

郵便番号 103 電話東京(270)代表4111 振替口座東京3-6518

〈換印省略〉落丁・乱丁本はお取替えいたします。
Printed in Japan

3033-3612-5214

訳 者 序

一 本訳書は R. F. Harrod, *Money*, London 1969, pp. xi+355. の全訳である。本書表紙には 'A comprehensive account of the nature of money and of the development of monetary theory and of modern institutions' という内容説明的な標語が記されているので、「歴史・理論・政策」という副題をつけた。

本書は、「はしがき」にも書かれているように、著者がオックスフォードで四〇年もの長きにわたって実施した一連の講義が基礎となっている。もちろん講義の内容は、その間、たえず変化したし、彼がオックスフォードを退いた後も加筆修正が続けられて、当初の「原型」はほとんどその跡をとどめてはいない。したがって、本書は、四〇余年の彼の学究活動を通じて到達した彼の貨幣思想および貨幣理論の総括である。

二 サー・ロイ・ハロッドは、常に自らを「ケインジアン」と呼んでいる。オックスフォード卒業後、一九二二年から二三年にかけて二学期間、彼はケンブリッジ・キングズ・カレッジに留学して親しくケインズの教えを受けた。その間彼は毎週ケインズに小論を提出して叱正を仰ぐことを怠らなかったといわれるが、彼の経済学への開眼はまさにこのときにはじまった。ケインズ逝去後、ケンブリッジ・マンでない彼にケインズの遺言執行者たる弟サー・ジョフリーから「ケインズ伝」の執筆が依頼されたのも、彼がいかにケインズ経済学のすぐれた理解者であり追隨者であるかを物語っている。彼の *The Life of John Maynard Keynes*, London 1951 (塩野谷九十九訳『ケインズ伝』)

初版三分冊、昭和二九—三〇、改訂版全二巻、昭和四二）は、期待にそむかぬ見事な出来栄で、ハロッドの全著作の中でも最も光彩ある力作であり傑作である。

ところで、ハロッドが常にケインズの理論的著作の中で、『一般理論』にも増して、高く評価するのは大著『貨幣論』全二巻である。この著はケインズが伝統的理論から脱却する道を模索した苦闘の記録でもあるが、このハロッドの評価は、『一般理論』の光におおわれがちな『貨幣論』の中になお汲み取られるべきものが多分に残されていることを示唆するものとして注目に値する。本書はそういうケインズ解釈のうえに立っている。

三 本書にはもちろん著者固有のものがある。とりわけ二つである。第一は、「成長理論」の立場がそれである。

ハロッドが、短期静学としてのケインズ経済学を越える長期動学としての成長理論の先駆的開拓者であることは周知のことである。その方向への端緒はすでに *The Trade Cycle: An Essay*, Oxford 1936 (宮崎義一・浅野栄一共訳『景気循環論』昭和三〇) に現われている。ケインズ的な乗数理論にクラーク、フリッシュ流の加速度原理を結合しようという着想がそれである。その着想を定式化し、彼固有の「成長モデル」を構成したのが “An Essay in Dynamic Theory”, *Economic Journal*, June 1939 であって、そのモデルの学説史上の地位や政策との関連を素描したのが *Towards a Dynamic Economics*, London 1948 (高橋長太郎・鈴木諒一共訳『動態経済学序説』昭和三五) であった。その後、成長と利子率との関係が “Second Essay in Dynamic Theory”, *Economic Journal*, June 1960 など二連の論文で検討されていたが、このほど、これまで彼に与えられた数多くの批判に答えながら自らの理論のいっそうの彫琢を志した新著 *Economic Dynamics*, London 1973 の刊行を見た。注目すべきことは、彼以後の成長理論が「新古典派理論」に見られるように多分に実物タームの純粹理論として展開されているのに対し、最近のハロッドにおいて成長過程における利子率の作用が追求され、かつて『一般理論』が「貨幣的経済理論」

の完成といわれたと同じ意味において、成長理論の「貨幣的理論」化が試みられているように思われることである。読者は、本書においてそのことを見いだすべきである。

四 第二は、国際通貨の面に多くの力点がおかれていることである。

ハロッドはまた、ケインズが『一般理論』で確立した「所得分析」的方法を国際経済学に導入した先駆者であった。*International Economics*, Revised ed., London 1939（藤井茂訳『国際経済学』昭和二七）がそのことを示しているが、元来彼の貨幣に関する研究は国際通貨の面に主要な力点がおかれていた。特に第二次世界大戦後、はじめポンドが、ついでドルが動揺しはじめ、IMF体制が危機にさらされるに至ってからは、彼は世界に向かって「流れるごとく」その見解を発表し続けている。*The Pound Sterling*, Princeton 1952（東京銀行調査部訳『ポンド・スターリング』昭和二八）、*The Pound Sterling, 1951-58*, Princeton 1958（東京銀行調査部訳『現代のポンド』昭和三四、これには前者の訳も含まれている）をはじめ、時事小論を集めた *Topical Comment: Essays in Dynamic Economics Applied*, London 1961（塩野谷九十九訳『景気変動と国際金融』昭和三八）や国際通貨制度の改革を論じた *Reforming the World's Money*, London 1965（堀江薫雄監訳『国際通貨改革論』昭和四一）などは、その面での彼の活躍ぶりを示している。

本書における国際通貨事情に関する叙述は、一九六八年一月の国際通貨危機に対するコメントで終わっている。それ以後、その前年リオ・デ・ジャネイロのIMF総会でその創設が決まったSDRは世界の期待のうちに順調な成長を遂げつつあるが、他方、ドルは一九七一年八月金兌換を停止し、同年末にはスミソニアン合意によって金平価をも切り下げた。そのことはドルを基軸とするIMF体制の実質的崩壊を意味するものにほかならなかった。そこで、各国通貨は一九七三年二月ドルの再切下げを機会に大部分変動相場制に移行した。一九七二年には、国際通貨制

度改革のためのIMF二〇ヵ国委員会の発足を見た。それがいかなる成案を得るかはいまや世界の注目の的となっているが、それに対する評価の手がかりもまた本書の中に見いだされるであらう。

五 ハロッドは、戦後世界をあげてのコスト・プッシュ・インフレーション傾向にも並々ならぬ関心を寄せている。*Policy against Inflation*, London 1958 (村野孝・海老原道進共訳『安定成長の通貨政策』昭和三六)や *Towards a New Economic Policy*, Manchester 1967 (館龍一郎監訳『新しい経済政策』昭和四四)は対インフレ政策の提言である。彼の主張について注目されることは、「所得政策」の重要性が強調されていることであって、本書においても所得政策は貨幣政策および財政政策と相まってポリシー・ミックスの三つの柱となるべきものと考えられている。

六 最後に私は、著者サー・ロイ・ハロッドに対し、日ごろ彼から惜しみなく寄せられる温かい友情に心から感謝するとともに、本訳書の刊行が意外におくれたことを深くお詫びしたい。なお本書の出版に関して多大の労を煩わした東洋経済新報社出版局の黒野幸春氏に対し厚く感謝の意を表したい。

昭和四八年一月

塩野谷 九十九

日本版への序

私の論著『貨幣』が日本語に翻訳されたことは非常な光栄である。それはまた非常な喜びである。私の他の著書もすでにいくつか日本語に翻訳されている。〔本訳書を含めて一一冊〕

私は三たび日本を訪れた。それらの機会のうち二回は、日本経済新聞社主催のもとに講演しながら、広く各地を旅行した。これらの訪問は私の生涯にとってきわめて楽しいひと時であった。その都度私は日本の自然と日本の芸術のすばらしい美に魅せられたからである。

本書は、実際の議論もかなり含んではいるが、大部分一般原理を取り扱っている。貨幣制度運営の原理はすべての国において同一である、といった言い過ぎであろう。しかし、貨幣の本質に関する定義そのものから生ずるいくつかの類似点が存在する。したがって私は、この書物が日本の大学においても有用であるだろうことを念じている。

一九七三年六月二八日

ロイ・ハロッド

は し が き

本書は、私がオックスフォード大学で四〇年以上も実施した一連の講義の内容を書物の形にまとめたものである。この講義がその時その時の出来事に照らして修正されたことはいうまでもないのであって、その原形はもう残っていないのではないかと思う。私がこの講義を実施した最後は一九六七年であったが、その後もさらにこれに筆を加えたことはもちろんである。

本書の大部分はその時にはすでに形を成していたが、そのすべてができ上がっていたのではない。いま本書に最終的な形をとらせるのは、私にとって時期的に不運であったといつてもいいかもしれない。一般に著者は教科書において読者に、主題の一般理論についてばかりでなく、若干の制度の——単に短命なその適用形態とは異なった——永続的な形態についても知ってもらおうとするものである。私がオックスフォードを引退したのは一九六七年九月三〇日であった。その後、やっと一年余り過ぎたころ、リオ・デ・ジャネイロでの特別引出し権の承認、金の二重価格制、ポンドの地位を強化するための数多くの重要な取決め、一九六八年一月のヨーロッパに集中した激しい通貨危機などが起こった——この通貨危機の結末がどうなるかはいまのところまだわからない。これらの決定や変革は、単に過渡的な重要性をもつだけのものとしてではなく、われわれの通貨制度の恒久的な道標とみなされるべきものを変えてしまったものと考えられてもいいかもしれない。しかし、そうであるかどうかはまだわからない。私は本書の出版を遅

らせなくなかった。新しい制度的協定が貨幣制度の永続的な特徴になるだろうという確信をわれわれがもちうるようになるには、私が出版をどれだけ遅らせる必要があるかを断言できる人はだれもないだろう。私は、本書を印刷にまわす以前に起こったおもな出来事は書きとめた。

本書は、貨幣問題についていっそう大きな識見を得たいと思う、学部や大学院レベルの大学生その他の人々によって読まれることを意図したものである。本書の目的は何よりもまず一般原理の定式化にある。しかし、本書には歴史的事実もかなり多く織り込まれている。貨幣の諸原理は、貨幣が現状にまでいかにして発達してきたかについての何ほかの知識なくしては、底深く理解することはできない。貨幣とは何か。それは、われわれが実験室の分析によって、それが常時どのような特性をもっているかについて正確に検定できると信じている、金のような、物体ではない。貨幣は社会的現象であって、その時その時の特徴の多くは、人々がそれをどのようなものであると考え、あるいはどのようなものであるべきであると考えるかに依存する。人々のそのような考えはそれ自体また、確立された伝統の漸次的な積重ねを通じて、過去に起こった重要問題や危機に依存すると同時に、かぎを握る地位にある当局によって、よかれ悪しかれ、なされた決定に依存するのである。

一定の定義に基礎をおく抽象概念として考えられた貨幣についても若干のことをいうことができる。そのような歴史的発展とは絶縁された純粹貨幣理論は、いささか浅薄なものにならざるをえない。その日その日の解釈や決意に役に立ちうる貨幣の理論は、それよりはるかに内容の豊かなものでなければならないのであって、そうであるためには歴史を顧みることが必要である。

本書の順序はおそらく普通とはちがっている。私は、铸貨、銀行券、銀行預金および外国為替市場というような、過去長い間存続し、将来もまた存続するであろうと思われる貨幣の形態を叙述することからはじめた。私には、読者

を、いわば、純粹に理論的な議論に引き入れるには、その前に読者に貨幣が具体的にはどのようなものであり、将来どのようなものになるだろうかについて知識をもってもらうことが必要であるように思われたのである。そのあとで私は理論的な説明に進んだ。最後に、後の諸節で私は抽象理論から離れて、最近じまった諸制度を記述するために制度の問題に帰った。読者はこの最後の段階で純粹理論の若干の知識から得るところがあるだろうと思われる。かくして筋道は次のようになっていく——おびただしき歳月に耐えてきた諸制度、純粹理論、そして現代の諸制度。

私は、本書が私自身の国を越えて、値打ちのある教科書とみなされることを願っている。この関係で私が弁解しておかなければならないと思うことは、ポンドについてやや頻繁に言及したことである。私が希望することは、そのことが島国根性の現われであると解されないことである。言及ははじめの諸章で特に目立っている。それがゆるされていいと思われる理由がある。一九一四年以前にはポンドが通貨として卓越した重要性をもっており、かつ貨幣に関する古典的な論争、決定および実践的教訓の多くが何よりもまずポンドに関連していたことがそれである。それらから導き出されてきたものが、ドルその他の通貨のための制度に翻訳されることがしばしばであった。

一九二五年に私は、オックスフォード大学で、連邦準備制度に関して八回にわたる連続講義を実施した。その時、当時相当教育のあるイギリス人でさえ講義の題目が何を指しているかよくわからなかったのにいささか驚いた。私は同様の講義を第二次世界大戦まで一年おきに実施した——連邦準備制度の出版物や同制度に関する書物を参考にして講義の内容を最新のものにすることに努力しながら。また私は、一九三〇年以来、ワシントンの連邦準備制度理事局やニューヨークの連邦準備銀行と繰り返し接触した。長い年月にわたって私に示された配慮と親切を、私は心からありがたく思っている。したがって私の望みたいことは、本書を読んで下さるであろうアメリカの読者が、イギリス人は特にアメリカに關係のある貨幣問題をあまりよく知らないだろうと考えてもらわないことである。

序文で感謝の意を表わすのが通常である。そのことは、私の場合には、私の経済学者としての思索生活のすべてを語ることになるのであって、それはここでは適切ではないだろう！

しかし、索引をつくるという骨の折れる仕事で私を助けてくれた妻に感謝したい。

またロックフェラー財団には、修正と書直しに従事した期間中、きれいなサーベローニ別荘に滞在する便宜を与えて下さったことに感謝したい。

R・F・H・

目次

訳者序

日本版への序

はしがき

第一部 貨幣の形態

第一章 貨幣

一 序説	三
二 貴金属	五
三 摩損（グレッシヤムの法則）	七
四 鑄造し権または輸出権（兌換性）	二
五 逆兌換（貨幣鑄造税）	三
六 複本位制度	六
七 名目貨幣	三

八 複本位の終焉	三
----------	---

第二章 銀行券と銀行預金	元
--------------	---

一 銀行券	元
-------	---

二 貨幣数量説（地金委員会報告、一八一〇年）	三
------------------------	---

三 リカードの別の見解	三
-------------	---

四 銀行預金	元
--------	---

五 ピール銀行法（一八四四年）	四
-----------------	---

六 ピール銀行法への反動	五
--------------	---

七 必要支払準備	五
----------	---

八 イギリスの制度の活動状況——ひとつのケース・スタディ——	六
--------------------------------	---

第三章 外国為替	元
----------	---

一 金本位	元
-------	---

二 修正された金本位（I・M・F）	六
-------------------	---

三 短期資本移動（平価に対する完全信頼）	六
----------------------	---

四 先物外国為替市場	九
------------	---

五 短期資本移動（信頼の欠如）	九
-----------------	---

六 短期資本移動（伸縮的為替相場）	一〇
-------------------	----

七 「クローリング・ペグ」……………	一〇
八 基礎的不均衡……………	二四

第四章 金本位（古い型の）の腐食……………	二五
-----------------------	----

一 一九一四—三二年……………	二五
二 変動相場制についてのイギリスの経験（一九三一—三九年）……………	三六
三 イギリス国外のポンド保有……………	四四
四 合衆国以外でのドル保有……………	五五
五 ポンドとドル——比較……………	五七

第二部 貨幣理論

第五章 序……………	一七
------------	----

第六章 数量説……………	二二
--------------	----

一 数量方程式……………	二二
二 「数量説」の真髓……………	二九
三 他の見解……………	二九

第七章 ケインズ革命 一五

一 『貨幣論』 一五

二 『一般理論』 一九

三 流動性選好 二〇

四 利子論 二七

第八章 成長理論 三三

一 完全雇用か成長か 三三

二 適正成長 三八

三 自然成長 三九

四 貨幣政策の理論 四三

第九章 対外均衡の理論 四六

一 経常勘定の収支均衡 四六

二 資本移動 六一

三 最近における若干の議論 六四

四 成長 七三

第三部 現代の制度と政策

第一〇章 第二次世界大戦後の合衆国およびイギリスにおける国内政策	二五
一 合衆国およびイギリスにおける貨幣政策の復活（一九五一年）	二五
二 『経済学の新しい次元』（合衆国）	二九
三 イギリスの経験（一九五五—六八年）	三〇
第十一章 国際制度	三八
一 国際通貨基金	三八
二 国際討議（一九六三—六七年）	三三
三 リオ・デ・ジャネイロ（一九六七年）	三七
四 ポンドの平価切下げ（一九六七年）	三九
五 金の二重価格制（一九六八年）	四〇
六 通貨危機（一九六八年一月）	四六
第十二章 ユーロ・ダラー	四八